香港日本人学校における英語教育と現地校交流会
―段階的な現地理解交流を通して―

前香港日本人学校香港校中学部　教諭
愛知県豊橋市立八町小学校　教諭　星　野　　匠

キーワード　国際理解教育、香港、現地理解、英語指導、現地校交流

赴任校の概要（2025年4月1日現在）
香港日本人学校香港校中学部
Hong Kong Japanese School
URL：https://www3.hkjs.edu.hk/
児童生徒数：小学部136人　中学部99人

1 はじめに

香港日本人学校は、昭和41年（1966年）に設立された長い歴史を有する日本人学校である。現在、小学部は香港校と大埔校の2つのキャンパスを持ち、中学部は香港校で学校生活を送っている。令和8年度（2026年度）からは、香港校が大埔校に統合され、すべての日本人学校の児童生徒は大埔校での学校生活を送ることになる。

私は2022年4月から在外教育施設で教育活動を行う機会を得て、香港校中学部で3年間生徒の指導に従事した。中学部では、習得した英語や元々の英語力を活かし、1年生から3年生にかけて段階的な現地交流会を実施している。ここでは中学部の英語授業のあり方や英語力を活かした現地交流会について紹介する。

2 香港校中学部で行われている英語の授業

香港校中学部では、「世界で活躍するグローバル人材の育成」を学校教育目標として掲げ、日々の教育活動を行っている。英語科では、「英語が使える日本人の育成」をテーマに日々の授業改善に取り組んでいる。本校の英語教育はカリキュラムを柔軟に運用し、週に6時間の英語の授業を行っている。2022年までは習熟度に応じて、1つの学年を5クラスに分けて授業を行っている。AクラスからEクラスまでに分け、AとBクラスは週6時間のうち4時間を現地の英語スタッフ（English Teacher）、残りの2時間を日本人の英語教員が担当する形態をとっている。Cクラスは3時間をEnglish Teacher、残り3時間を日本人の英語教員、DとEクラスは2時間をEnglish Teacher、残り4時間を日本人の英語教員が行っている。English Teacherが行う授業をEnglish、日本人の英語教員が行う授業を英語と呼んでいる。

Englishの授業では、Native speakerによる英語の授業で、日本でいうところのALTにあたる外国人が主に授業を担当する。5レベルに分けているため、AやBの上位クラスはエッセイやプレゼンテーションを中心にアカデミックな英語の習得に向けて授業をしている。DやEクラスは英語に慣れることから始め、基本的な文法や文型を英語で学んだり、Short Storyを読んだりするなど比較的簡単な英語を用いて英語を学んでいる。Cクラスはちょうど中間クラスにあたるため、生徒の実態に応じて上位クラスに近い内容を取り入れたり、下位クラスのゲーム感覚を取り入れたりと楽しみながらも英語が身につく授業を展開している。

日本人教員が行う英語の授業では、日本の英語の教科書を用いて授業を行っている。生徒の英語力のレベル差が大きく、同じUnitの授業でも指導方法を変えて行わないと生徒にとって退屈な時間になってしまうため、通常の一斉授業以上に授業準備に時間がかかることがしばしばあった。特に、Aクラスには英検1級を取得している生徒もいるため、日本で教員をしていた時と比べると多くの驚きや発見があり、生徒の英語力の高さに圧倒されることも多くあった。しかし、英語のNative speakerであっても、文法やスペリングなどはエラーが多く、生徒にとって簡単なはずの英語の教科書が役に立つシーンが多くあった。

5段階のクラス編成は、入学時にクラス分けテストを行い、English Teacherとの面談や日本人教員との合同会議によって生徒のレベルを分ける。学期ごとにクラスの見直しを行い、生徒の希望や教員からのアドバイスなどを踏まえ、生徒の実態に合ったクラス変更をしている。

3 段階的に行う現地校交流会、現地理解教育

(1) 中文大学交流会

中学1年生は、中文大学（香港の公立大学）の学生と交流会を行う。中学部に入学して初めての交流となるため、英語の力よりもローカルの大学生と交流することをメインの目的として掲げている。初めての交流会なので、生徒の心理的なハードルを低くするために、日本語を学んでいる学科の学生に交流を依頼している。生徒は「香港の魅力を発信しよう」というテーマで、それぞれ香港の名所や食べ物、飲み物、交通などから自分でテーマを決め、1枚のレポートにまとめる。そのレポートをまとめて、香港ガイドブックを作成する。近年は香港を訪れる観光客が減少しているため、旅行ガイドで紹介される場所だけでなく、現地でしか得られない情報を発信することも大切であると伝え、調べ学習を行った。また、「本物」にこだわることを徹底し、インターネットやSNSなどにある写真は使わずに、自分で写真を撮ることにした。

中文大学交流会では香港人である大学生に調べたことを日本語で発表し、内容についてのアドバイスをもらうことを目的としてプレゼンテーションを行う。英語使用の要素はほとんどないものの、難しい日本語がうまく相手に伝わらないことが意図せずに起きる。そこで初めて英語使用の必然性が生まれる。この現象を利用し、生徒の英語使用を促している。なかには広東語のほうが得意な生徒もいるが、グループ全員が理解できる言語が日本語か英語のため、英語使用の必然性は非常に高いといえる。海外生活では、このように英語の使用に生徒たちも四苦八苦しながらコミュニケーションをとろうとする姿勢は、日本では見られない光景のため、とても新鮮である。

大学生からは、日本人が感じる魅力と香港人が感じていることに違いがあることを教えてもらい、生徒にとっても新しい発見につながった。また、「ほかにもこういうところがあるよ」といったアドバイスをもらって、自分のレポートに追加する姿も見られた。ローカルの情報もたくさん手に入り満足感を得られる活動となった。このガイドブックは、新たな香港を知るために、学年の生徒全員に配付したり、新しく赴任する先生方に配付したりするなどして、香港の魅力を再発見できる生きた教材となっている。

中文大学との交流会

(2) 宣基中学校交流会、マレーシアの大学生との交流会

中学2年生は、現地にある宣基中学校と修学旅行で訪れるマレーシアの大学生との交流会を実施する。宣基中学校の交流会では、同じ学年の香港人と交流を行っている。毎年異なるテーマで行われており、2024年は日本の文化を紹介した。同年代の交流会であるため、打ち解けるスピードが非常に早く、和やかな雰囲気で進行される。アニメや漫画をテーマにしたプレゼンテーションもあり、共通の趣味を見つけたり、日本と香港の違いを教えてもらったりして、互いの文化理解を深める良い機会となった。この会での共通言語は英語または広東語に限られているため、生徒は使いやすい方の言語を選ぶことになる。香港生まれの生徒ではない限り、英語を使用することが必然となる。宣基中学校では、グループでできる遊びを考案し、香港式じゃんけんや出題者が二択の問題を出し、多い方を予想するゲームなどを行った。

マレーシアの大学生との交流会は、修学旅行で訪れるクアラルンプールにある大学の学生が市内を案内する活動を行う。英語学習やマレーシア文化の理解を深める機会としている。生徒は事前に行きたい場所をリストアップし、旅行会社を通じて大学生とコンタクトをとる。その後、大学生から送られてきたツアープランをもとに、半日の観光プランを作成する。ほとんどの生徒が初めてクアラルンプールを訪れるため、大学生のガイドは生徒にとっても有益である。更に、この交流では英語しか通じない環境が意図的に作られているため、生徒もすべて英語でコミュニケーションをとる必要がある。

修学旅行当日は宿泊しているホテルまで大学生が迎えに来て、一緒に市内に出かけた。安全上、教員や添乗員がグループに付き添うが、言語上のサポートはしないため、生徒のみで乗り越えなければならない。このようなチャンスを与えることで、生徒が英語を話す必然性を高めることができる。また、現地の大学生とコミュニケーションをとることを通して、言語だけでなく文化の理解につながる。

原住民の生活体験

マレーシアの修学旅行では、ほかにも原住民の村の生活を体験する活動を行った。交流会とは少し違った雰囲気だが、英語を使って説明を受けたり、体験したりした。生徒は竹を使って吹き矢を作ったり、干した藁を使って髪飾りを作ったりした。同世代の原住民の子どもがいて、学校に通わずに村の仕事をしていることに驚きを隠せなかった。しかし、これらの体験も異文化を理解するうえでは大切な要素であることを感じた。

(3) 香港大学交流会

中学3年生は、香港大学を訪問する。香港大学では、大学生と共に授業を受けたり、食堂で食事をしたりして過ごす。大学生の1日を体験することにより、将来の進路選択に役立てることを目的としている。授業では、Leadership Trainingなど、多くの知識がなくても理解が容易な内容を学ぶことができる。また、SDGsなど、身近なテーマについて意見交換会を行う。日本と香港の違いを感じながら、大学生との交流を楽しむことができる。

香港大学交流会

香港大学では、ほとんどの授業が英語で行われているため、多くの外国人留学生が在籍している。アジアのみならず、欧州や北米など、出身国は多岐にわたる。2023年には、英国の教育誌が発表した「最も国際性に富む大学ランキング」でオ

クスフォード大学やケンブリッジ大学を抜いて1位を獲得するなど、アジアでも注目される大学の1つである。このような環境で大学体験をすることは、生徒にとって非常に貴重な経験となる。

4 おわりに

香港日本人学校中学部では、国際交流のための多くのプログラムを実施しており、学年ごとに段階的に行うことで「話したい」という気持ちを持ち続けることができている。現地の学校だけでなく、修学旅行で訪れた国でも国際交流ができる点は、大きな特徴である。現地校との交流会は、在外教育施設の最大の利点であり、同年代の子どもたちと交流できることは、生徒にとっても有益であり、気軽に交流できる。「世界で活躍するグローバル人材の育成」という教育目標の実現に向けて、英語力の強化だけでなく、相手の文化を理解し、尊重する姿勢を育むなど、真の国際人を育成する環境が整っていると言える。

香港日本人学校での勤務を終え、現在は英語で授業を行うイマージョン教育コースの担任をしている。帰国後も、グローバルな人材を育成する機会をいただいたことに感謝し、今後も世界で活躍する児童生徒を育成していきたい。